



みどりの風

平成25年10月2日発行

校報 第501号

〔みどりの風 第44号〕

練馬区立関町北小学校

畑をつくる

校長 大野 泰弘

ある新聞の「仕事力」という連載記事を読んでいましたら、浅野悦男氏(シェフズガーデン エコファーム アサノオーナー)が語った文章が掲載されていました。浅野氏は「なぜ、自分のつくった農産物に自由に値段を付けて売れないのか。コントロールできない自然を相手に苦労して生産しているのに、それを反映できない矛盾を何とかしたい。」という思いをもち、17歳のころから農業に取り組みられました。当時作っていたサツマイモは澱粉用なので、60kgで4,500円程度だったのだそうですが、青果市場では10kg単位3千円ものサツマイモを売っている人物がおられたそうです。その価格は平均の40倍で、米よりも高額で売られていたとのこと。浅野氏は、その人物に教を請い、種芋も分けていただいたそうです。その人物が浅野氏に語ったことが「芋を作るのではないよ、いい物ができる畑を作るんだ。」という言葉でした。「形を作るのではなく、いい物をつくる土壌が大切である。深く耕すことである。」という意味だそうです。初めての出会いにもかかわらず、何の見返りも求めず、自分の奥義を惜しみなく教えてくれる凄さ、たゆまぬ研究と努力を続けながら、その成果を個人のものとしなない人柄、そういったことに大きな衝撃を受けたと浅野氏は語っていらっしゃいました。そして、浅野氏は「大きな自然の力を相手にするのだから、リスクや厳しさはあるのが当たり前。私たちは、ただそこに潜んでいる恩恵を引き出す努力をする。」とおっしゃっています。そのことにより、浅野氏の仕事に「筋が通った」のだそうです。

この浅野氏の言葉を学校教育に置き換えてみれば、「いい物をつくる土壌」とは「学級(専科)経営」のことであり、「学校経営」にもつながってくることです。また、「大きな自然」を「将来のある子どもたち」と考えれば、その「恩恵を引き出す」とは「子どもたちの可能性や力を引き出し、伸ばす」ということにもなるでしょう。その基礎になることの一つとして、学校では、「学級における子どもたち一人一人の存在感、学級への所属感・連帯感、活動への達成感・自己有用感を大切にしよう」と心がけて指導にあたっています。

そして、学校教育に限らず、教育の第一義的な場が家庭であることを思うと、「いい物ができる畑」とは、それぞれのご家庭における親子の対話、温もり、安心感、信頼関係……ということになるのかもしれない。

さて、今月半ばで1学期が終わり、数日を挟むだけですが、2学期へと切り替わります。学校は、学年は、学級は、それぞれ子どもたちの心や学ぶ力を十分に伸ばし、育てることのできる「よい土壌」、「深い土壌」となっているか、そして、その前提として、子どもたちにとって安全であり、安心して学習したり、学級での生活を営んだりできる環境となっているかどうか。こういったことをあらためて見つめ直し、必要に応じて、保護者の方や関係機関との連携を強めながら、後半の6ヶ月に臨みたいと考えています。

2学期には、展覧会をはじめとする、子どもたちが楽しみにしている行事がいくつもあります。また、本校の校内研究の内容や子どもたちの学びを公開する研究発表会も予定されています。保護者、地域の皆様には、学校教育の推進に向けてご理解とご協力をお願いするところが多々ございますが、引き続き、学校へのご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。